

二〇一九年度 卒業論文

東日本大震災から学ぶ宗教実践

L  
1  
6  
0  
0  
5  
4  
城 大真

## 目次

序論	1
本論	2
第一章 浄土真宗の考える震災における宗教者の役割	2
第一節 親鸞聖人の看取りに関する考え方	2
第二節 臨床宗教師の考え方	4
第二章 東日本大震災における残された人の霊体験・死者との関わり	5
第一節 被災者の苦悩	5
第二節 被災地の霊現象	6
第三章 遠野の信仰と東日本大震災から臨床宗教師を考える	8
第一節 遠野の貧困による信仰心	8
第二節 遠野の庶民と信仰を平地でつなぐもの	14
第三節 東日本大震災の魂への信仰と現代に求められたもの	19
第四節 震災時の宗教者の活動から臨床宗教師の役割の考察（岩手県釜石市仙寿院にて）	22
結論	25
註	

## 序論

私は授業の中で岩手県釜石市の様子を映画にした『遺体―明日への十日間―』で遺体安置所の中で僧侶が読経をするシーンを見て、東日本大震災という多くの人が亡くなられた大震災に関心を持った。突然多くの命が亡くなったとき、僧侶である私が一宗教者として残された人々の支えになりたい、そしてそのように支えることが宗教者である私の役割ではないのかと考え、東日本大震災から震災後創設された臨床宗教師を見ていった。その中で、この震災では被災者の方々から霊や魂の証言が多く聞かれていたことが特徴として挙げられていた。震災で突然奪い去られた多くの命を目の当たりにする中で、残された人々は魂や霊の存在を感じていたのだ。

そしてこの人々の魂の信仰とは何かという部分を調べると、小林道憲氏の『宗教とは何か』には原始宗教について述べられ、その一番大きな要因は人間への恵と猛威を振るい、我々ではどうすることもできない自然への畏怖であるとされた。その死の無常さの中で、死者に守られていることを見出し人間の死はまたその大いなるもの（自然）へと帰るのであった。この目に見えないものへの畏怖から、あらゆるものが魂を持つという考えに至るようになり、タイラーは宗教の土台は「霊的存在への信念」だとも述べていた。この震災における霊や魂もまさに自然への畏怖からによるものであり、この現象というのは本来の原始的な信仰が東北には残っていたからこそ現れたのではないかと私は考えた。そこでその信仰をとらえるために、人々の魂や神の存在・伝説が事実として記された柳田国男氏の『遠野物語』と、その舞台となった民俗学発祥の地岩手県遠野市の宗教観・死生観をとらえ、震災時独自の霊や魂の現象を紐解いていく。そのうえで、この東日本大震災で現れた霊や魂は宗教者・臨床

宗教師に何を求められていたのかを考える。

したがって本論では、『遠野物語』を中心とした遠野の信仰から民俗学の視点を通し、震災の霊現象における人々の信仰心と宗教者・臨床宗教師としての役割について考察する。

## 本論

### 第一章 浄土真宗の考える震災における宗教者の役割

#### 第一節 親鸞聖人の看取りに関する考え方

まず、人が亡くなられたとき悲しむ人々に親鸞聖人はどのように僧侶として接されたのかを見ていく。鍋島直樹氏の講義の中においてそれは三つの姿勢にまとめられていた。一つは、親鸞聖人は「なげきもかなしまんをもいさむべからず<sup>1</sup>」と述べられ、泣きたいときは泣きそれを注意しなくてよいという態度をとられていた。嘆き悲しむことで往生が左右されることはないとし、またこの嘆く姿こそが阿弥陀様がお救いくださる凡夫の姿ではないかとされた。二つ目はその一方で、「かなしみにかなしみを添ふるやうには、ゆめゆめとぶらふべからず<sup>2</sup>」と宗教者（僧侶）として悲しんでおられる方がいるときに、悲しみに悲しみが重なるようにしてはならずその人の顔に微笑みが出るくらいにして去る、それが人を弔うということなのだ<sup>3</sup>とされた。自分の話で感動をさせる

のではなく遺族へ必要以上の悲しみを誘うようなことは避けておられた。三つには「たもつところの他力の仏法はなく、なにをもつてか生死を出離せん。」とあり阿弥陀仏の救いに身を任せることの他力が、悲しみ苦しみから離れさせ、それは同時に仏となった亡くなった方から支えられているという他力の意味であり、その悲しみを超える心よりどころが大切になるとされた。つまり、凡夫である我々の自らの意思でその悲しみを乗り越えることはできないのだとされた。人々の心から出てくる悲嘆にも、阿弥陀様のお救いの働きの中で、親鸞聖人は受け止め寄り添っておられたのであろう。そしてこれらの姿勢が龍谷大学の臨床宗教師・宗教者としての社会実践への姿勢となっている。二節でも見るが鍋島直樹氏の「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム」には大谷光真門主のお言葉から

災害や事故で突然に愛する人を失くした時など、どれほど相手を想っても思い通りに助けることができないことがある。しかし、その無力な自己を如来の大悲の光は照らし育んでいる。至らない愚かな自己がそのまま大悲にいだかれている。亡き人から受けた愛情や優しさが死別した後も自分自身の心に生きている。こうした大悲のぬくもりと自己を支えるものとのつながりが自己を突き動かし、限界を知りつつもなお相手を思う姿勢が生み出されてくる。如来の大悲に照らし護られた愚者の実践がある。<sup>4</sup>

と阿弥陀様による他力の救いの中に無力な私たち宗教者も被災者の方々もいること、そしてその亡き人の大悲を自分自身の心の支えとし実践を行う、その姿勢が示されている。臨床宗教師として、被災地の現場に立つとき、残された・傷を負った方への姿勢という部分で親鸞聖人のみ教えが役立つ。しかし、被災者の方々というのは、

様々な宗教心や心情を掲げられているなかで、特定の宗教や宗派に偏らない臨床宗教師は被災者の方々の悲しみにどのように応えようとしているのか、次の節でみていく。

## 第二節 臨床宗教師の考え方

ここから、臨床宗教師としての活動や考え方についてみていく。その中で、龍谷大学にその研修が設置される際の「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム―から、その臨床宗教師に求められるものを見ていきたいと思う。そこにあった臨床宗教師の姿とは、教学基盤を真宗学のうえに「スピリチュアルケア」の実践があった。真宗学に基づくものとは一節に述べた親鸞聖人の思想から社会実践への姿勢であり、「スピリチュアルケア」のケアとはそばに居ること・寄り添うことであった。私たちは完全に被災者の方々と同じ立場になることは出来ない、その中で宗教者としてできることは確かにそばに居ること、そしてその存在を確認させてあげることだろうと私は思う。

そして、細谷亮太・大下大圓氏の『「いのち」の重み』という本から、臨床宗教師の大下氏の活動から現場での姿勢を見ていく。その大下氏自身の臨床宗教師の活動からは、被災された方のケアと共に、その悲劇を風化させない役割も担っているように感じた。被災された方へのケアとは、「お茶っこ」<sup>5</sup>を開きとにかく被災者の方々のお話を聞く。そこから始まり様々なニーズに応えておられた。大きな悲嘆を抱いた方たちには触れ合うことから始められ、とにかく寄り添うことやそばにいてあげることが大切で、また宗教者としてその地でただただ復興へ

の祈りをささげることが支援となっていた。そして、当時宗教を超えて皆が被災者のために祈っていたと語られておられ、被災地に向けてただひたすらに手を合わせる、祈りをささげる、これこそが臨床宗教師の始まりなのだとは感じた。また、震災時の支えだけでなく風化させない役割でもあったと感じたのは、臨床宗教師が、被災者の方との関係を途絶えさせることなく活動されていたからである。被災者の方にとってその悲劇というのは一生消えない心の痛みであるのに二、三年の月日が流れれば世間は節電もしくなり記憶から薄れていつているのが現状であった。その中で寄り添い続け、心に傷を負い震災で時が止まってしまった被災者の方を時間と共に置き去りにさせないようにされていた。

ここまで見てきた中で、悲しむ人々に対して臨床宗教師の姿勢はその宗教の基盤のもと、寄り添うことであることが示されていた。しかし、この震災において確かに被災者の支えとなる姿勢を見出したが、悲しむ人々から生まれる心情や信仰心を深くみることの視点が必要であると考え、次ではまず東日本大震災で出てきた被災者の方々の悲しみを見ていく。

## 第二章 東日本大震災における残された人の霊体験・死者との関わり

### 第一節 被災者の苦悩

この東日本大震災では地震発生から、津波、火災、原発など様々な形で多くの人々の命や生活が奪われていっ

た。私が今回見ていく津波の被害で被災者の方の大きな心のストレスとなっていたのは、自分の目の前で突然亡くなった多くの命が大きな苦痛となっていた。そしてなにより、津波により見つかからない遺体、身元不明の遺体、見つかったても火葬ができず供養しきれない遺体と、別れができない被災者の方々が多くおられた。多くの周りの命が亡くなられた上にその別れさえもできなかったのである。また、その遺体を探す、供養する、残された被災者を支援する人の中にも多くの被災者の方がいた。それに加え生活面では津波により家と多くの思い出が流され避難所生活を余儀なくされ、当たり前の生活ができず心はますます不安定になっていっていた。

東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清（ゼミナール）の『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死のはざままで』では震災の被災の大きさや亡くなった人の多さに目を向けがちであるが、そういった目の向け方がまた、他の様々な形で被災をされ心に傷を負っておられる方の心を傷つけ、「事の本質は、それぞれの人生のものさしで災害を置きなおしてみることにある。」<sup>6</sup>と述べられていた。被災者の方にとってはどのような被災であれ大きなショックを受けているのだが、同じ被災者の多くの死と、周りの人々の被災地や被災者を数字や被災状態で見ると、被災者が自分に起こった出来事を周りと比べることとなり素直に悲しむことをできなくさせていたのであった。

## 第二節 被災地の霊現象

これまでの被災者の方々の悲しみの中で、今回の震災には他の阪神淡路大震災などとは違った残された人（被



災者の方々）による霊的な体験が特徴としてみられていた。それはノンフィクション作家奥野修司氏の『魂でもいいから、そばにいて 三・一一後の霊体験を聞く』という一冊の本に記されている。

まず、この一冊の本を読み終えて震災における霊的な体験というのは、世間的な怪談話などに登場してくる怖れるものとしての霊ではなくて、霊と出会うことによって残された人々が安心できる・心の支えとなる存在であった。この本の中で、霊と出会う場所というのは、携帯やおもちなどの機械から霊ととらえられる場合もあったが、多くは夢や寢床で死者と出会うということが語られていた。悲しみの中で、夢で娘とあった人は本の中で、もしかすると、こういう体験がなかったら生きられなかったかもしれない。妻と子供と家を根こそぎ失くしたんです。なぜ生きているのか、ときどきわからなくなるときがあります。悲しい、寂しい、つらいばかりだったら身が持ちません。そういうとき、妻と娘は私に頑張れよと力をくれるんでしょうね。あの世で逢えるんだからって？

と語られていた。そこでは、別れのできない遺族の方々にも、確かに霊や魂の存在が心の支えとなっていたのである。またこの体験をされた方は、同じ思いをする身内の方々とその体験について確認しあい語り合い、時には東北独自のオガミサマなどといった死者と会話のできる人の存在から魂の声を聴き、魂がそばにいることやいつまでもその死者を忘れないようにする人の心が現れていたのではないかと感じた。本の中では、その霊体験を著者の奥野氏に話しているときに思い出し泣かれる方もたくさんおられたが、その涙は悲しみだけでなく、体験を語ることでまた亡くなられた方と出会い生きる糧へとつながる涙なのではないだろうか。被災地にはそのような

魂を感じたが共有することのできない方や、亡くなった悲しみさえも語れない方も多くいて、本の中でも被災者の方々のそのような声はたくさんあった。だからこそ、残された人のそばに寄り添う臨床宗教師の姿が支えとなり、その役割として示されたのであろう。

しかし、私は悲しみに寄り添う姿勢が示された臨床宗教師には、その被災者の信仰心を見つめとらえることも大切ではないかと考えた。そして、序論で述べたよう東日本大震災での被災者の悲しみにおいて、この特徴的な霊現象は古来の信仰と共通する部分が見られると考え、臨床宗教師であるからこそ、人の死の直面の中での宗教そのものへの信仰心や、宗教者の役割を見る必要があるのではないかと思う。次からは、その古来の信仰（民俗学の視点）から、その信仰心を紐解き、そこからこの震災において宗教者・臨床宗教師に求められたものをもう一度考えていきたい。

### 第三章 遠野の信仰と東日本大震災から臨床宗教師を考える

#### 第一節 遠野の貧困による信仰心

今回多く見られたこのような霊的体験は、ほかの災害時の時などには見られない珍しいものでこれは、東北が育む文化や宗教心とかかわりが深いのではないかここまで考えてきた。そこで東北の育む宗教心として焦点を当てる遠野とは、山を中心とした、人が生まれ老い死に死後の世界に行くまでの魂の一生（魂の循環）を町全体に

見出し、その中で人々の生活に関わる様々な神々が存在し、信仰される地であった。遠野の山には、神と死後の魂が宿るとされていたのだ。その人々の信仰を確かなものとする伝説が古くから語り継がれ、明治時代にまとめられたのが『遠野物語』である。このような山への自然信仰がなぜ、文明開化で日本人の古き文化が失われる中でこの地に残り書き残されたのか。柳田氏が「国内の山村にして遠野より更に物深き所には又無数の山山人の伝説あるべし。願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。」と語った日本を忘れ去り行く平地人を戦慄させる、神々や魂への信仰に迫り、震災の霊へつなげる。その中で、私は遠野の信仰を紐解くポイントとして、貧困と平地で信仰をつなぐものの二つの視点に絞り述べていく。

まずここで先に遠野の信仰の中心と述べた遠野の山の信仰の歴史と、そこから見出された遠野の神と町の魂の循環について述べておく。『遠野物語』では、遠野の山々の中で遠野三山<sup>9</sup>と呼ばれる山があり、その中でもその伝説から早池峰山が中心となり、早池峰山への信仰がこの遠野の死生観の始まりであると言える。その早池峰信仰の歴史を遠野市史編修委員会の『遠野市史』と月光善弘氏の『山岳宗教史研究叢書七 東北霊山と修験道』からみると、大同元年に獵師である藤蔵が山頂で権現を見たところから修験の山として始まり、自然への信仰から神が宿ったのち一山寺院<sup>10</sup>となるも、妙泉寺は移動し平地に下り、藤蔵系統の始闢家は山へ残り御山の信仰を守り二家に分かれ<sup>11</sup>山への信仰の母体が平地と山に存在することとなった。その早池峰信仰の始まりから、神と死後の魂の宿る場所として山を見出し、そこには山神・山人・山男・山女・天狗などが住み伝説として『遠野物語』に語られ、平地の人々が介入することができない、異世界が伝えられていたのだ。

その神・魂の宿る山を中心に、町の魂の循環が造られ、人は神（自然）からの猛威と恩恵を受け生活し、この世での生を終えれば、その人の魂はこの早池峰山に帰り、そこに宿り遠野を見守るものとなる。そしてその魂は、お盆に返ってくるだけでなく、登山をすることで死んだ人の魂に会えるのだとも考えられていた。遠野では険しい早池峰山などの遠野三山だけでなく低く美しい山にも神が宿るとされている。貞任山では子供・独身で亡くなった人と出会うことができる山として、早池峰山に登れない人たちのための死者との面会する場所までもあった。遠野を見守る死者・魂との出会いが重要視されそれを山に見出し、遠野の街の中で魂が循環しているのであった。

この節では、まずこの遠野に残った山を中心とした信仰の大きな背景として貧困を考え、遠野の信仰に迫る。そのきっかけとなったのは、二〇一九年九月三日に二度目の遠野に訪れたときのカップ淵で聞いたお話の中で、「遠野の原点は貧しさである」とガイドの方が語られていたことであった。

そこでまず、遠野を度々襲った貧困の実態について、『遠野市史』から飢饉についての資料を見て述べていく。私に取り上げたのは宝暦・天明・文化年間・天保の飢饉についてで、江戸時代の前期から後期にかけてのものである。この史実を見ていくと、前の年は豊作であったが寒冷により飢饉に陥り、数年不作が続いた後に一年だけ大豊作となり、その年年によって作物の収穫が不安定であった。また一年の中でも初めは良い天気であったが、急に天候が崩れるなど、激しい気象の変化に悩まされることとなった。そのような飢饉の中で、宝暦五年には子を寺院や神社の門前、山や川へ捨てる親、自ら川に飛び込むものがいたという。また、天保の大飢饉では栄養失調のものに加えて、疫病も流行し毎日葬儀が行われ、多い日は五つも六つもあったとされていた。店頭や軒下で

は野倒れ死するもの、早瀬川や猿ヶ石川にはいつも死骸があったと記された。遠野では長年にわたり、町全体が死というものに直面し続けてきたのであった。

ここから、この遠野を襲った貧困という背景の中で生じた、山を中心とした神々と魂の循環を見出した遠野の信仰に迫るが、その信仰を私は二つに分けて述べていく。それは一つが明日の自分たちの命への神々への祈りで、そのもう一方は飢饉が起こり、大勢の人が亡くなる死との直面の中での神や山への信仰、つまり弔いの面である。明日への命への信仰は貧困をもたらす天候はその年その年だけでなく、明日変わってしまうかもしれない。そしてそれは飢えにつながり直接自分たちの命にかかわってくる問題であり、その中で恵みと災いをもたらす自然の神々へ祈りをささげる心が途絶えることはなく、それが祭りといった伝統へとつながっていったのではないか。早池峰信仰の一山寺院で早池峰山が御神体の開慶水から農業にとって欠かさず信仰されていたのは、人々への恵みと災いの二面を持つ自然へ、その猛威・貧困から農業にまつわる自然の神々に恵みを願ったと言えるのではないだろうか。

そしてもう一方の貧困による死との直面の中での信仰・弔いにおいて、その町の抱える死の多くは老いだけでなく、前の貧困の実態に見たような子殺しや自害など人自らにより殺されるものや飢えや病気であり、この貧困の無情な別れの中で人々の神や魂への信仰があったのだ。それは、まず「遠野の原点は貧困」と語られた、物語でもよくカッパが出現するカッパ淵で見られた。そこでは、水の神として存在し信仰されるカッパの神のもとで、貧困で育ててくることのできない五体不満足で生まれてきた子供を親がこの川に流していた。その行為はカッパが

神様であるから、子供が死んだ後に万年も生きて後々の代まで遠野を守るカッパの神様となるように、子供を川へ流したのだと現地で語られていたのだ。この話の確証はないが、これまで見たように確かに遠野の貧困の歴史の中で、多くの人が自殺や子を殺していたことは語られている。このような間引きについて『遠野物語』の中ではカッパの子を産み殺したという話があり、この話は河童を利用した間引きの正当化ではないかとの見方もあり、これらから遠野の神やその伝説は貧困による死とつながるものがみられる。

またこの時代は、年老いた人たちも貧困により追いやられ、死を迎えるデンデラ野とダンノハナという場所があった。デンデラ野とは六〇才を超えた老人を捨てた場所である。そこには付随してダンノハナという地がある。デンデラ野は遠野の悲しい歴史として語られ、訪れる前は老いた人たちを全く村と孤立させている印象であったが、私が遠野を訪れた際、実際に向かうと山口集落の民家から二〜三〇〇mほどしか離れていなかった。そこは貧困により追い詰められた老人が、日中は里に下りて農作業をして、わずかな食料をデンデラ野へ持ち帰り過ごし死を迎える場であった。また、デンデラ野は死を迎える場所でも死者が通る場所でもあることが遠野の物語の中で記されていて、夜中に死者が歩いて山の方へ行くお話もある。そして付随するダンノハナは、共同墓地となり死の空間となっていた。なぜデンデラ野が山でなかったのかは、死後の魂の行方を見出し、その死を迎えるまでの場であったからであると私は考えた。デンデラ野においてもカッパ淵でのお話と同様に、死後その魂がまた我々を遠野を守ってくれるものとなるように願い、意味を込め造られ老人もまたそこへ向かい信仰したのではないだろうか。遠野は貧困による死から、自然の中の魂の循環で、山を中心に死を待ち・別れ・帰る・再び出会う

場所までも見出し、その場所に神も見出していた。

これまで遠野の信仰を二つに分けて見てきたが、その山への魂や神への信仰心は貧困による苦しみ・悲惨な別れであったからこそ生まれたものであった。そこには貧困の中、自然への恵みを願い、死者の行方・魂の行方を願う遠野の人々の信仰心と共に神や魂の伝説が存在したのだ。

そして、この遠野の貧困・死の直面による神や魂への信仰心を、日本の忘れ去れる山への信仰について書かれた柳田国男氏の『山の人生』<sup>12</sup>から考えると、

官府の公認するところならずとも、家から家へまたは母から娘へ、静かに流れていた信仰には、別に中断せられた証跡もない以上は、古いものが多く伝わりと見てよろしい。それというのが信仰の基礎は生活の自然の要求にあつて、強いて日月星辰というがごとき壮麗にして物遠いところには心を寄せず、四季朝夕の尋常の幸福を求め、最も平凡なる不安を避けようとしていた結果、夙に祭を申し謹み仕えたのは、主としては山の神  
荒野の神、または海川の神を出でなかつたのである<sup>13</sup>。

と述べられている。信仰の基礎は生活の自然でその信仰は静かに流れていたものであり、その静かな信仰は遠野の貧困や今回の震災でも人々の心の奥底に流れていたのではないか。そして、信仰されていたのは尋常の幸福・平凡な不安と述べられ、この二つは生と死で置き換え遠野の信仰心と共通するのではないだろうか。東北・遠野では常に飢饉で死との直面となり、我々が今当たり前と感ずる生を願い、遠く感じている病氣や飢えや死を避けようとしていた。そして、その中で山・荒野・海・川に魂や神の信仰を見出しそれが確かな支えとなっていた。様々

な宗教・文化が入り込み、近代文明開化の中でも貧困という死の直面を抱えた遠野の人々の信仰心が選択したのは、前に述べた宗教の出発点である原始宗教の大いなるものへの信仰の性格を強く持つ、古来の自然信仰（遠野の山々）と結びついた神仏習合の修験であった。つまり、貧困を背景に魂や神の宿る山をよりどころとし、この地に信仰が残っていたのであろう。しかし一方で、その『山の人生』で述べた遠野のような死生観を受け継いでいく人々の信仰心は、我々のように文明の発展とともに生を当たり前に感じ、人々の死の恐怖による悩みも少なくなっていくに伴い薄れていったのだ。

## 第二節 遠野の庶民と信仰を平地でつなぐもの

ここまで遠野の庶民がこの貧困から、神や魂をよりどころとしていた信仰心の中で人々のそば、特に死を迎えた場所に神や魂とその伝説があった。したがってここでは、その人々の信仰心に応じ、支えた平地で山の魂や神を庶民とつなぐ存在が大きな役割を果たしたと考え、ここから遠野の信仰を紐解く。その存在として巫女など占いをする者、そして早池峰信仰と結びついた神社・平地で権力者と結びついた寺院など宗教者の役割を見る。まず、遠野には修験とかかわりのある巫女以外に占いや魂について語る人が多く存在した。それは、巫女以外に山から特殊な能力を受けたものもいたという『遠野物語』の一〇八話<sup>14</sup>に記されている。ここから、巫女だけでなくこの世とあの世（山）をつなぐ存在がいて必要とされていたこともわかりえるのと同時に、この遠野の山々は個人の修験の場であった性格が強いと述べたように、この話のような人たちもまた修験・山伏として修業する人



に付き山に入ったのではないかと考えられる。そこで山による特殊な能力を持ったのではないだろうか。また、巫女について、ここからは谷川健一氏の『日本民俗文化資料集成 第六巻 巫女の世界』の資料を参考にみていくが、私はその役割や、修行を見ても僧侶のような宗教者と変わりないものではないかと思う。ここでの遠野の巫女は、祈禱だけでなく口寄せという巫女が先祖や故人といった人からのお告げを聞き伝えるものや、死者が出て葬式・法事を終えた後に呼ばれ死人の仮姿となった巫女が話をする役割までも担っていた。この巫女は涙を流しながら故人の言葉を語り、遺族と共に寄り添い、その巫女がまた山とをつなぐ存在であるから、人々はその山への信仰を疑うことはないであろう。また、その巫女になるには弟子入りをして様々な修行を積まなければならず、それを経ても神づけの式で神が行者に乗り移らなければならぬものもいるらしい。その神づけにより神仏への仲介者となった巫女のお言葉は、平地の中に貧困で苦しむ、庶民の信仰心に応える魂の行方を確かに表してくれるものとなっていたのだ。次に見る寺社においてもその共同体の中で人々の信仰心への役割を果たしているのだと考えられる。

そして、平地での信仰の役割として遠野の寺社は『遠野市史』から見て考えてみる。特にここではお寺と信仰の関わりについて注目する。まず神社の役割として多く見られたのは病氣・魂・農業・商人・ウマの守護など人々の生活にこたえたものである。神仏分離の際に神社として存在し残ったのも、宗派としてではなく庶民の不安な心により信仰されていたことがわかりえる。また、様々な権現をまつる神社や元が修験場であった神社があり、遠野に様々な修験が存在していた。『遠野物語』からは、その修験・山伏にも庶民が山での様々な不思議な出来事

を相談するという、山への人々の信仰心との関わりが見える。

一方の寺院では、遠野の支配者（長）と関連した末寺や祈祷のお寺が多くみられた。また、山伏がいたがそれをよそに寺を移動させたものもあり、早池峰の妙泉寺のように町やその長と結びつきが多い印象である。お寺は早池峰信仰から町・支配者と結びついたり山伏を置き去りにしたりする中で、直接的な山岳信仰とのかかわりはなくなっていくように見える。しかし、遠野では度々飢饉に陥り、その天候に対する悩みや不安、恐怖が庶民の心を揺さぶる。その中で支配者や長とつながりのあるお寺は、遠野の人々を支えるために山と人々をつなぐ役割を果たしたのではないかと考える。私が訪れた、貧困の中カッパの神となることを祈り間引きをしていたと語られたカッパ淵のそばには、九世紀から一一世紀半ばまで岩手県を支配した安倍氏の屋敷と、その菩提寺の常堅寺がそばにあった。そして、その常堅寺にも、カッパ・オビズルサマといった神が存在した。つまり、長や寺院がその場所に、遠野に存在する神々を見出し、人々のそばに置いたのではないだろうか。貧困によるカッパ淵での間引きのお話や、カッパ淵にたたずむ乳が出るように願うカッパ神も、体の痛みをとるオビズルサマもそこに神がいたことで、死と直面した不安定な庶民の心の大きな支えとなったのではないだろうか。その神々には、貧困から生まれる人々の信仰心を支える、安倍氏・常堅寺の願いがあったのであろう。また、遠野の寺院はその常堅寺やその末寺を中心に死後の魂についても大きく関わっていた。『遠野物語』九七話<sup>15</sup>には生と死をさまよう魂の話で登場し、八七・八八話には魂が寺参りをするというお話も多く登場してくる。私が遠野の寺院で見た、供養絵額も人々の信仰心を受け止める象徴の一つであろう。供養絵額とは、亡くなった人のあの世の姿に願いを

込め描かれ、私がお寺で見た供養絵額はどれも悲しい姿をする者は見当たらなかった。これは江戸時代ごろから大正のものとしてお寺で見た供養絵額は『遠野物語』には登場してこない。しかし、柳田国男氏の『雪国の春』柳田国男が歩いた東北』において大正九年東北旅行の浄楽寺でこの絵を見た柳田氏は、様々な記念品に交じり新しいものから古いものまで肖像画の額が隙間なく掲げられていたと言っている。そしてそこには写真だけでなく、江戸時代の色彩画がありそれが大部分を占めていた。その中で一家団欒の絵も多いと述べ、津波で亡くなった人たちのものもあつたと言われ

立派にさえ描いてやれば、よく似ているといつて悦ぶものだそうである。こうして寺に持って来て、不幸な人々はその記憶を、新たにもすればまた美しくもした。まことに人間らしい悲しみである<sup>16</sup>。

と語られた。このお寺は岩手県釜石市にある常楽寺というお寺である。突然の悲しみにも海や川や山に魂の帰る場所が分かつているからこそ、そこでの姿が良いものであるように願ひ、そのように書けば喜ぶ。また、魂の帰る場所をつなげる存在を寺院が担ったからこそ、その後の魂の姿を寺院へ奉納したのではないだろうか。その証拠に東北各地の寺院に、この供養絵額は宗派関係なく奉納されている。

そしてここにある、柳田氏の言う不幸な記憶を新しくする「人間らしい悲しみよう」とは、供養絵額だけでなく遠野においても、貧困による悲惨な多くの死から生まれる魂や神への信仰心を受け止める中でも見られていた。貧困による死の別れの場であつたカッパ淵やデンデラ野に存在した山の魂や神の存在や伝説は、無常に死を迎え

るものだけでなく、その別れを受け止める残された人々の心を支えるための、柳田氏の言う不幸な記憶を新しくする「人間らしい悲しみよう」があったのではないだろうか。これらからみると、平地のなかで支配者・長と結びつくお寺も遠野の古くからの民間信仰を軸とし、庶民の人たちの喜び苦しみ、その信仰心と共に宗教者が神の存在・魂の行方を見出していたのではないだろうか。

そして、このような遠野の自然信仰と宗教者とのかわりの一方で柳田氏は、

恐らくは近世全く変化してしまった山の神の信仰に、元は山人も山伏も、共にある程度までは参与していたのを、平地の宗教が段々にこれを無視しまた忘却していったものと思っております<sup>17</sup>。

と語られ、小盆地の神々が単なる妖怪となったといったことも述べていた。ここで、まずこの妖怪の定義について考えてみると、カップにしてもザシキワラシにしても現代の人々に聞けば間違いなく妖怪と答えるであろう存在は、遠野ではそれは確かに人々の支えとなる神であった。つまり、神は信仰が途切れたとたん妖怪へと変わるのだと私は考えた。それは遠野の伝説の中に巫女や山伏や寺院がかかわったように、この自然信仰と人々を結びつける役割であった宗教者がいなくなること、必要とされなくなること、魂や神の信仰が庶民から遠ざかって行ったのだろう。それに対し、魂や神を見出した遠野の貧困による信仰の中には、庶民だけでなく、様々な宗教者・寺院までも信仰の中にいて、人々の信仰心に応え山の信仰とつなげ支えとなっていたのであった。

ここまで遠野の信仰・死生観へ迫ったが、これら二つの視点から遠野の神や魂の山への信仰は、遠野では貧困という大きな問題の中、自然信仰の中に巫女をはじめとした宗教者がいて、また魂の証明や様々な神様を苦しむ

人々に示していた。町という共同体の信仰の中で、貧困により町全体が死と直面したからこそ人々の魂や神への信仰心が生まれ、つなぐものとして宗教者が役割を果たし、人々のそばに神や魂がいた。一方で死の直面による町の共同体意識が薄ければ個人個人で好きな宗教を選び、宗教者はつなぐ役割を失い自然信仰を忘却することになったのであろう。柳田氏は当時これらの自然信仰が、入り込んできた宗教により失われつつある時代であったからこそ『遠野物語』の初めに「平地人を戦慄せしめよ」と述べたのではないか。なぜなら、戦慄する時にはもうその存在が信仰される神ではなく、人々から離れ恐れられる妖怪となってしまうからである。

### 第三節 東日本大震災の魂への信仰と現代に求められたもの

そして、ここからまず現代・東日本大震災の信仰心・霊現象へ迫っていく。現代では科学や医療の発達により、遠野のような無情な死への直面は明らかに少なくなり、これまで見てきた遠野の信仰は今我々（平地人）にとって最も遠い信仰となっていた。そんな時東日本大震災により、この自然の脅威を感じ町全体が突然、死と直面し、この自然災害で大きくこの霊現象が出てきた。それは、これまで見てきたそこにわずかに残っていた信仰・自然の神や魂とつなぐ役割を持つ、イタコやオガミサマといった大いなるものをつながる人があったこと。そしてなにより、遠野と同じ町全体の死の直面という出発点から「尋常の幸福をもとめ、最も平凡なる不安を避けよう」とし、また、死者との出会いによって不幸な人が記憶を改める、「人間らしい悲しみよう」を行おうとする遠野と同じ信仰心が生まれたからではないだろうか。

しかし一方で、被災地での霊や魂の現象の信仰心の中でそこには、静かに流れる信仰の中から出てきた魂や霊の帰る場所が生活の中に見いだされてなかった。それは、『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死のはざま』の宮城県名取市閑上の慰霊碑の意味合いにおいて

死者を神に昇華して切り離してきた歴史を踏襲するならば、あらかじめ抽象化された死者⇨神への想いを慰霊碑に捧げて祈ることができた。しかし現代人が手を合わせて思い浮かべるのは、抽象的な存在ではなく身近な人の姿である<sup>18</sup>。

と述べられていたことから分かる。慰霊碑を遺族の方は、拜んでもらうことではなく自分が死者に共感し、抱きしめ慈しむことを見出していたことは、魂の帰る場所や神々もいなくなっていたからこそ、現代では新しい場所に亡くなった人をあてはめていたのだ。それは、第二章の東日本大震災での霊体験において携帯、おもちゃ、機械や寝床と遺族の方の身近なところに、魂と出会える場所を見出していたことも同じではないだろうか。また、『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死のはざま』では多数のタクシーの運転手の霊の目撃証言において、死者も突然の死で別れが告げられず大切な人に会うための手段として個室という空間のタクシーを利用したのではないかとされていた。私の中でそのタクシーに乗る霊の姿は、前に述べた『遠野物語』の夜中に死者が山の方へ歩いていくお話や、デンデラ野を死者が歩いていたお話と重なり、もし魂の循環が残っていたのであれば、死者も残された人も山で面会しようとその空間へ向かったであろうと考えた。東日本大震災の霊は、町全体の死から遠野と同じ信仰心を抱いたが、突然命を奪われた人にも、残された人にとっても魂の宿る大切な場所が失わ

れどちらもさまよい続け、新しい場所を見出していたことであまりにも多くの魂や霊の姿が語られたのではないだろうか。

そして、続いてここで重要なのが被災者の方々が魂の帰る場所を必要とされた中で、現代には遠野にはあった生と死のはざまを示すものがいなかったことと私は考える。遠野でそれを担ったのは山と人をつないだ宗教者であったが、現代や震災ではその役割を「平地の宗教が段々に無視しまた忘却<sup>1)</sup>」<sup>2)</sup>して、この震災時の現象は霊性・生死のはざまを担うことが、もう一度宗教者に求められたのではないか。

その求められた宗教者と霊との関わりについて、震災前に出版されていた鎌田東二氏の『シリーズ思想の身体霊の巻』<sup>3)</sup>からみていく。その中で、樫尾直樹氏が「霊性」「スピリチュアリテイ」<sup>4)</sup>の定義から、現代のスピリチュアリテイ文化に対する教団の在り方に疑問を投げかけられた。樫尾氏はこの「スピリチュアリテイ」は現代の人間の日常性の中で、自らの命を主義主張にかけることや生死のかかわる医療現場や、他者のための自己犠牲の実践や大自然とのつながりから構成されるものとした。そして、その「スピリチュアリテイ」は本来宗教が後ろ盾となっていたが、現代社会においては「スピリチュアリテイ」が町の占いなどの、非宗教的領域に入り領域横断的となっているとした。つまり宗教者は元々担っていた「スピリチュアリテイ」の側面から離れ、人々もその面を宗教へは求めなくなっていたのだ。そして、自分たちの組織を守るためだけの後ろ向きの教団が多いことが挙げられ、大切なことではあるが布教だけに重点を置くのではだめで、今このスピリチュアリテイ文化の中にいる宗教として伝統的な宗教の信憑性がかけ、生死の意味を真剣に求める現代に対応すべきだと述べられた。こ

ここで求められた宗教者の姿勢とは、遠野の貧困（死）による町全体の自然信仰の中で、人々の不安定な心を支える役割を担っていた、平地である世（山）をつなぐ宗教者の姿のことではないだろうか。

つまりこの本が書かれ時を経て、震災によりここで指摘された「スピリチュアリテイ」に対する教団の在り方の問題点の部分があらわになったのではないだろうか。東日本大震災において、遠野と同じ死の直面という出発点から出てきた、さまよった人々の「霊性」の信仰心を受け止め、霊や魂をつなぐ本来の役割を非宗教的領域から再び現代の宗教者に求められたのである。そして、この民俗学的な視点から考えた東日本大震災の霊現象で、再び求められた宗教者の役割を、現代では特定の宗派に偏らない臨床宗教師だからこそ担え、被災者の方々の「霊性」「スピリチュアリテイ」に応えるべきなのではないだろうか。

そして、霊や魂から具体的にどのような臨床宗教師として被災者の方の支えとなっていくべきであるのか。次では実際の被災地の寺院の活動から震災や霊・魂を見て臨床宗教師へ考察していく。

#### 第四節 震災時の宗教者の活動から臨床宗教師の役割の考察―岩手県釜石市仙寿院にて―

そしてここからは、これまでの魂や霊の現象を民俗学的な視点で見えてきた中で、東日本大震災で再び求められた宗教者の役割において、私の被災地でのインタビューを通し臨床宗教師としてどのようにその役割に応え、被災者の方々と寄り添い支えていくのかを考えていく。二〇一九年九月三日私はこの臨床宗教師に興味を持つきっかけとなった、東日本大震災をえがいた映画『遺体―明日への十日間―』での遺体安置所の体育館で僧侶の読経



を上げるシーンのモデルとなった岩手県釜石市の日蓮宗仙寿院の住職芝崎惠應氏を訪ねお話を聞かせていただいた。このインタビューの全貌は参考資料として提示し、ここでは要点を挙げ述べていく。

インタビューに訪れた私は、「もう二度とあのような場所でお経をあげたくない」と語られる芝崎氏の言葉の重みに、実際に現場に立たれた方だからこそ臨床宗教師となるには相当な覚悟がいるのだと感じておられ、それをひしひしと感じながら震災のお話を聞かせていただいた。そしてまず、芝崎氏自身が震災前から死を迎える方々へのケアを大切にしておられたそのお話から、もちろんそこまでの檀家さんとの関係性もある中で、芝崎氏自身が死に直面し、死を当たり前のこととして受け入れているからこそ、同じく死と直面した人に伝わる言葉なのだと感じた。口先だけで自分自身が何も考えず経験をせず、接することは相手にもわかりえるもので何も意味のないことなのだと強く感じた。前にも述べたが現代は発展の中で、死の直面から遠ざかっていて、我々僧侶もそのような時代に生きる一人であり、臨床宗教師としても僧侶としても宗教者として人々の支えとなるとき、自身が死について考え・直面し向き合ってその宗教を信仰していなければならぬのだと思う。

そして、震災時に仙寿院でも現れた霊について語られる芝崎氏は、あの悲惨な震災に報われない霊の気持ちを受け止めているようなそんな印象を受けた。被災者の方々、亡くなられた魂・霊の一人一人の報われない気持ち、そしてそれを通して震災を正面から受け止めておられた。おそらくこの霊の体験談の文章を読まれた人の中には、信用ならないと思われる人が多くいるだろう。しかし私は、被災地で芝崎氏のお話を聞き、霊・魂は存在すると確信した。芝崎氏がその霊について語られることができるのは、芝崎氏自身が霊の存在から、震災による多くの

死者や残された被災者の方々と向き合ってきたからであろう。遠野においても被災地においても現地へ行かなければ感じられないものがあると私は思う。あの震災から九年が経とうとする今、私が遠野や被災地の現地を訪れお話を聞き、その信仰を確かなものだと感じた。ましてや町全体が死と直面し、死を突き付けられた震災当時、被災者でもありながら支援者として、現地に立たれ多くの死と直面し、遺族の方々や震災に向き合われた芝崎氏の霊の存在を語られるそのお言葉に疑いようがないと私は思うのである。だからこそ、帰り際の芝崎氏の、宗教が支えとなっていたお話を聞き、あの震災の中で確かに宗教・霊や魂の信仰心が心の支えとなり歩みを続けていたのだと感じた。そして、「今はこうやって復興したけど、一瞬あの風景を見たら神も仏もないと思ってしまうた、本当に、」と言われた芝崎氏の姿から、その現場に立つことがどんなに苦しい思いであったのかを感じた。

前に現代は魂や霊（スピリチュアリティ）が非宗教的領域へと入っていると述べたが、この震災において、その自然の循環や神はなくなりつつあったが、かつて遠野の信仰が町全体を包み込んでいたように、確かに霊や魂の信仰の中にさまざまな宗教・被災者の方々がいた。その中で、芝崎氏のように、宗教者が震災による被災者の方々の霊を受け入れること、そしてなにより自分自身が死や震災と正面から向き合い、魂の行方に寄り添っていくことが現代や震災に宗教者が求められた「スピリチュアリティ」において大切だと感じた。自然へと帰る魂の場所は薄れていようと、芝崎氏のように宗教者（日蓮宗の僧侶）として自身の死を見つめたうえで、魂や霊の存在から震災や亡くなられた方々と向き合っておられたからこそ、この東日本大震災において残された人々の心の支えとなっていたと強く感じた。ここに浄土真宗の臨床宗教師としては「如来の大悲に照らし護られた患者の

実践<sup>21</sup>」が当てはまるのではないだろうか。被災地での実態をお聞きする中で、臨床宗教師として浄土真宗の僧侶として、芝崎氏自身のご経験から聞かせていただいた。

## 結論

ここまで東北・遠野の宗教観・死生観の民俗学的視点から東日本大震災での被災者の霊現象を紐解くと、そこには死の直面（自然への畏怖）からおこる祈りと、死後の魂への信仰心が共通して人々の心に生まれていた。しかし、震災時平地の神々や魂の帰る場所は、『遠野物語』でみた神や魂と人々をつなぎ・示した宗教者の姿と共に人々のそばからなくなってしまった。そして、この震災で多くの魂・霊が現れ、さまよいその信仰心が宗教者に求めたものとは、これまで平地の宗教者がおろそかにしてしまっていた、宗派を超えた大きな意味での生死への介入であったと考えた。つまり、さまよい現れた多く魂や霊の現象は、遠野のような町全体の自然信仰の中で担う魂の行方や生と死のはざまを示す役割を再びこの震災で求めたのである。それはまた宗教・宗派を超えた宗教者としての活動を行う臨床宗教師であるからこそ、その役割を見出すことができ、それは芝崎氏の活動をお聞きする中で見えてきた。震災時にも『遠野物語』からみた遠野の街の信仰と同様に、魂や霊の信仰の中に確かに被災者の方や宗教者がいて、震災を受け止めていたのである。したがって、自然へと帰る場所や神々はいなくとも、

自身が僧侶として死と向き合ったうえで被災者・被災地を包み込む魂の信仰を疑うことなく受け止め、寄り添うことが大切であることを学び、ここに自身の死と向き合った浄土真宗の臨床宗教師としての「如来の大悲に照らし護られた愚者の実践<sup>2</sup>」がみえた。

この東日本大震災から、悲しみ苦しむ人々から出てくる信仰心こそ大切に尊重し、その霊や魂の信仰心を受け止め寄り添う宗教者・臨床宗教師には、民俗学の視点からその人々の心をとらえ求められたものを考え、応えることが大切であったと思える。今回、さまよい、現れた多くの霊や魂は、本来の宗教者の生と死のはざまでの役割を求めたが、またそれは、震災時のみならず普段からその狭間の役割を人々に示すことが大切であったのではないだろうか。人が死と直面した時に現れる宗教への信仰心とはいつの時代も変わらず、ただ宗教がその役割を忘却してしまっている部分が大きいと感じた。だからこそ人々の悲嘆の心に寄り添う臨床宗教師には、本来の人々の信仰心とそれに応えてきた宗教者の姿をとらえるための、ここまで見てきたような民俗学の視点も必要なのではないだろうか。

そして今後の課題としては、まず私はこの論文を作成するにあたって現地での声や経験が極めて重要だと感じた。臨床宗教師に求められるものを考えるにおいて、様々な参考資料から学ぶことも大切であるが、自らが死について考え現地に立ち、被災地での声を聴き見えてくるものが非常に多く、これからより多くの被災地での宗教者や被災者の方々と出会い自分自身が行動をし、その臨床宗教師の役割を考えていかななくてはならないと感じた。また、今回東日本大震災において考察した人々の霊や魂といった自然信仰による臨床宗教師の役割は、震災など

による町全体の死の直面による悲しみだけでなく、必ずやってくる一人一人の個人の死に寄り添うビハーラにおける、「霊性」や「スピリチュアリティ」の面にも民俗学的な視点から関与することができるのではないかと考え、今後の課題として深めていきたい。

- 1 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』九〇六頁。
- 2 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』九〇七頁。
- 3 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』九〇六頁。
- 4 鍋島直樹「臨床宗教教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム―六四頁。
- 5 ケアのための施設としてではなく、地域の人たちの目線で動けるサロンのような場として開かれた。被災者の方が気軽に立ち寄りお話ししていただき、その中で宗教者が自然体で寄り添うものであった。
- 6 東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清（ゼミナール）『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死のはざままで』九九頁。
- 7 奥野修司『魂でもいいから、そばにいて 三・一一後の霊体験を聞く』三三三頁。
- 8 柳田国男『遠野物語』七頁。
- 9 遠野三山は『遠野物語』にも記され、大昔女神が三人の娘を連れ遠野を通りかかったとき「もつともよい夢を見たものに最もよい山を聚ける」と言い一晚過ごし、結果三女が最高峰の早池峰山で姉たちがそれぞれ六角牛山・石神山をもらうこととなり今もその山をおさめているという。
- 10 『遠野市史』と『東北霊山と修験道』からまとめると、早池峰信仰は大同元年に獵師である藤蔵が山頂で権現を見たところから修験の山として始まる。国の中心では日本古来の神の信仰に仏教が伝来しその中の呪術が組み込まれ現世的で呪術的な修験道思想が登場して、貧困や病に求められるものが大きく、そのなかで国家統一の際に東北に修験が入り込んできたのだと言われた。御神体は山頂の池の水である開慶水でこの水は猿ヶ石川、北上川の源流であり農業にとって欠かせず信仰されてきた。遠野ではこの藤蔵の権現を見た三月八日は山の神が田の神になる日、宮地を選んだ五月五日は田の神をまつる日、神を祭った六月十八日は水の神をまつる月、九月の早池峰山閉帳は田の神が山の神となる月だと信じられる。修験としてはこの藤蔵が故郷伊豆から伊豆権現を奉持したことからはじまり、この長男の長円坊の時に霊威を聞きつけた慈覚大師（第三代天台座主）に荒々しい神を抑えてもらうため祭祀を譲り別当寺の妙泉寺（天台宗）を立てられる。のちに真言宗となるが天台・真言のどちらかの際にこの早池峰の権現名が与えられていると考えられている。ここから明治の神仏分離まで一山寺院となる。つまり、獵師の山の生活から生まれた修験が、天台の寺門派と結合した熊野系の修験者らに従うようになったとされている。
- 11 ここも『遠野市史』と『東北霊山と修験道』から、残った始闢家は庶民からの崇拜・信仰のもと成立して

いき、平地へ行った妙泉寺は阿曾沼氏・南部氏の支配者からの保護を受け変質していく。妙泉寺は山岳宗教の寺から阿曾沼氏・南部氏の保護により地頭の祈禱寺へと移り変わっていった。後の明治維新の際、妙泉寺が廃寺となるのと残った藤蔵系の始閣家の新三宮が現存しているのは庶民に信仰されていたかそうでないかの差である。指摘されている。早池峰の修験というのは組織化されることはなく、個人で山伏の血・宗教体験から山に登ることとなったと考えられている。

<sup>12</sup>柳田国男は『遠野物語』を書いた際は、物語はすべて事実であると述べられていたが、この『山の人生』は一五年の時を経て、日本に語られる山人やその信仰心について現実的に迫っていったものであった。ここから読み取ると柳田国男の考える山人とは、日本の原住民が追いやられたものというものである。信仰については、本の中では様々な山人伝説に触れ、その出来事の正体とは何であったのかを山に住んでいた原住民や修験山伏にあてはめながらその山人たちの苦悩と共に見ていき、これまでみてきたような山の信仰が徐々に平地から途絶えていったことが述べられていた。

<sup>13</sup>柳田国男『山の人生』一七四頁。

<sup>14</sup>遠野物語の一〇八話には

山の神が乗り移ったなどといって、占いをする人はよくあり、附馬牛村にもいます。が本業は木挽です。土淵村柏崎の孫太郎も、そんな占いをする一人ですが、以前は発狂して本心を失くしていました。ところがある日、山に入って山の神からその術を教わり、自分のものにしてからというもの、不思議に人の心の中を読むようになり、みんなをびくりさせました。その占いの方法は、世間の占い師とはまったく違います。書物などは見ずに、ただ、頼みに来た人と世間話をするだけです。そのうちに、急に立ち上がると、部屋の中をぶらぶら歩きはじめます。まもなく、頼みに来た人の顔は少しも見ないで、自分の心に浮かんだことを、ずばりと言います。が、まず、当たらないということがあります。たとえ、「お前の家の常居の板敷を取り外して土を掘ってみろ。古い鏡が、刀の折れたのがあるはずだ。それを取り出さねば、近いうちに死人が出るか、家が焼けるぞ」というぐあいには言うのです。占いを頼んだ人が、家へ帰って掘ってみますと、それは必ずあります。このような例は、指で数えていては足りないほどあります。(柳田

国男『口語訳 遠野物語』一九七—一九九頁)とある。

<sup>15</sup>病で生死をさまよっていた菊池松之亟が夢の中で、菩提寺の喜清院へ行きその門の向こうで死んだ父と男の子がいてこつちへ来てはだめだというので引き返したところ目が覚め生き返ったという話である。

<sup>16</sup>柳田国男『雪国の春 柳田国男が歩いた東北』一三九頁。

<sup>17</sup>柳田国男『山の人生』一九五頁。

<sup>18</sup>東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清(ゼミナール)『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死

のはざまで』四五頁。

<sup>19</sup> 柳田国男『山の人生』一九五頁。

<sup>20</sup> 樫尾直樹氏は『シリーズ思想の身体 霊の巻』において、鈴木大拙の『日本的靈性』から「靈性」を他者性と超越性に着目し、自己を超えた何ものかとながり、それが自分の中や自分と他者との間で働いている感覚と述べられ、またそれに伴い「スピリチュアリティ」については、超越的な存在者が、自ら働きかけ、影響を与えていること」と言われた。

<sup>21</sup> 鍋島直樹「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム」六四頁。

<sup>22</sup> 鍋島直樹「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム」六四頁。



【参考文献】  
書籍

- ビハラ実践活動研究会『ビハラ活動』本願寺出版、一九九三年  
 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』本願寺出版社、一九八八年  
 細谷亮太・大下大圓『「いのち」の重み 小児科医と臨床宗教師が語る「心の処方箋」』佼成出版社二〇一六年  
 奥野修司『魂でもいいから、そばにいて 三・一一後の霊体験を聞く』新潮社、二〇一七年  
 リチャード・ロイド・パリ『津波の霊たち 三・一一死と生の物語』早川書房、二〇一八年  
 石井正己『NHK一〇〇分de名著』ブックス 柳田邦男遠野物語』NHK出版、二〇一六年  
 柳田邦男『遠野物語』新潮社、二〇一六年  
 柳田邦男『口語訳 遠野物語』河出書房新社、二〇一四年  
 畑中章宏『災害と妖怪 柳田邦男と歩く日本の天変地異』亜紀書房、二〇一二年  
 鈴木岩弓・岩崎真幸『東北文化資料叢書 第七集 復刻東北民俗研究』東北大学大学院文学研究科東北文化  
 研究室、二〇一四年  
 大島暁雄・松崎憲三・宮本袈裟雄・門屋光昭『日本民俗調査報告書集成 北海道・東北の民俗 岩手県編』  
 三一書房、一九九五年  
 福田アジオ・古家信平・上野和男・倉石忠彦・高桑守史『図説 日本民俗学』吉川弘文館、二〇〇九年  
 金原左門『遠野のいまと昔 もう一つの『遠野物語』を歩いて』有志舎、二〇一五年  
 谷川健一・大和岩雄『民衆史の遺産 第六卷 巫女』大和書房、二〇一五年  
 柳田邦男『山の人生』角川文庫、二〇一三年  
 月光善弘『山岳宗教史研究叢書七 東北霊山と修験道』名著出版、一九七七年  
 遠野市史編修委員会『遠野市史 第一卷』萬葉堂書店、一九七四年  
 遠野市史編修委員会『遠野市史 第二卷』萬葉堂書店、一九七五年  
 遠野市史編修委員会『遠野市史 第三卷』萬葉堂書店、一九七六年  
 遠野市史編修委員会『遠野市史 第四卷』萬葉堂書店、一九七七年  
 谷川健一『日本民俗文化資料集成 第六卷 巫女の世界』三一書房、一九八九年  
 柳田邦男『雪国の春 柳田邦男が歩いた東北』角川文庫、一九五六年  
 小林道憲『宗教とは何か 根源的生命の帰一』ミネルヴァ書房、二〇一六年  
 東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清（ゼミナール）『呼び覚まされる靈性の震災学三・一一生と死  
 のはざままで』新曜社、二〇一六年

星野英紀・弓山達也『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社、二〇一九年  
鎌田東二『シリーズ思想の身体 霊の巻』春秋社、二〇〇七年

論文

鍋島直樹「真宗教学史 講義プリント」二〇一八年  
鍋島直樹「臨床宗教教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム―  
二〇一四年

二〇一九年九月三日岩手県釜石市日蓮宗日澤山仙寿院でのインタビュー

訪ねた経緯と臨床宗教師を目指していることを伝えると「率直に言うともう二度とあのようなどころで、お経をあげることはしたくないね」と一番初めに語られた。映画では俳優の國村隼さんが僧侶役として一か月間、お経の勉強をして、完璧に覚えて撮影に臨んだそうなのだが、違う体育館で遺体役はほとんどが人形であとはエキストラという状態でも、一言目でお経が詰まってしまいそれ以降は出てこなかったと後から國村さん本人から連絡があったと言われた。実際に芝崎さんが、お経をあげられた時も遺体は毛布などで隠されてあったが、それでもやはりだめだったとおっしゃられていた。

芝崎さんは震災の前から、檀家さんで死を迎えようとする人から病院に呼ばれることが多く、そのような人と接するときも僧侶である自分自身が死に対して恐れていた。死にたくないと思っていたりしてはダメだと言われていた。芝崎さん自身、震災体験はもちろんで、五年前に心臓が急に停止した経験があった。その時、目が覚めていなければ死んでいて、これが死ぬということなのか感じられ、檀家さんに病にかかられた人がおられれば「死ぬのは怖くないよ」と自身の経験も踏まえ声をかけるといふ。芝崎さんは、死の近い人に対して、死というあたり前に来るもの、その当たり前のことを当たり前だととらえさせることが大切だとおっしゃられた。「人は必ず死ぬ、それならそれまで自分らしく生きよう」と声を掛けられる。実際にがんの方と最後に面会を頼まれ、ご自身の経験からお話をされたその別れ際「私の悩みがちっぽけになって気が楽になった」と言われたその檀家さんは、がんの進行が止まり退院された話をされていた。また、震災時について詳しくお話を聞かせていただき震災時のお寺同士の支えあいのお話を聞いた。仙寿院は日蓮宗なのだが、震災により亡くなった檀家さんの多い禅宗のお寺や、被災で本堂の使えない他の宗派のお寺への手伝いをされていた。宗派関係なく助け合うと語られておられ、私が本堂へお参りさせていたときも「自分の宗派でいいからね」と声をかけていた。仙寿院にはキリスト教・浄土宗・浄土真宗・イスラムの方など様々な宗派や国から訪ねてこられていて、どの方も本当によく被災者のつらい経験を聞いてくださったと言われていた。その中でキリスト教の方が来られ被災者の方に「神がお救いください」と説いたところ、被災者の方が寝ころびながら「じゃあ、震災を起ささないでほしいかった」と言われ困っていたと言われた。「だから、教えを説くのではなく聞くことが一番大切だね。そこも、臨床宗教師につながると思うね。」と語って下さった。

そして、東日本大震災で、よく聞かれた霊についてお尋ねしたところ、震災時仙寿院にはたくさん遺骨が置かれ、そこで避難生活を送っておられた被災者の方々からたくさんそのような霊の話があったと言われていた。芝崎さんも、震災後一か月して境内の防犯カメラが復帰したので震災時のカメラをチェックすると、

夜中に壁を通り抜けていく人影が何回か移っていたという。「白い着物を着ていたわけでも、足がなくて浮いていたわけでもなくて、本当に人間そのままの姿だったよ。でも、胸を張って歩いている幽霊はいなかったね。みんなうつむいていたよ。」と語られていた。他にも、芝崎さんの娘さんは身元の分かっていない遺骨にいつも人と接するようになり、「おはよう」と言いながら挨拶をしていたのだが、ある時その挨拶に遺骨から「おはよう」と返事が返ってきたと驚いて駆けてきたらしい。「多分、うれしかったんだらうね」と芝崎さんはおっしゃられ、「今は遺骨を移動させたから、出てこないね」と話された。震災後芝崎さん自身も、「朝のお勤めの時によく横や後ろに出てくることがあったよ」と言われた。これらのお話をしてくださる芝崎さんは、その霊を優しく向かい入れるような口調であった。そして、「霊は悪さをするようなものではないし、何も怖いような存在ではない、そしてその存在に何も疑ったり驚いたりしないよ」と語られていた。そして帰り際に芝崎さんが「震災時少しの信仰心でもある人であれば自分自身の心をコントロールできていたけど、ない人であればそれができていなかったね。だから普段から手を合わせることは大切。私たち僧侶はその宗教を広め教えていく存在なのだから、それが確かに心の支えになるのだから、宗派は違うけれどもお互いがんばろう。」と声をかけていただいた。また、高台にある仙寿院から、釜石の風景をみながら「今はこうやって復興したけど、一瞬あの風景を見たら神も仏も仏もないと思ってしまうた、本当に、」と語られインタビューを終えた。

- ① 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』九〇六頁。
- ② 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』九〇七頁。
- ③ 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 註釈版第二版』九〇六頁。
- ④ 鍋島直樹「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム―六四頁。
- ⑤ 『「いのち」の重み 小児科医と臨床宗教師が語る「心の処方箋」』から見ると、ケアのための施設としてではなく、地域の人たちの目線で動けるサロンのような場として開かれた。被災者の方が気軽に立ち寄りお話ししていただき、その中で宗教者が自然体で寄り添うものであった。
- ⑥ 東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清（ゼミナール）『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死のはざままで』九九頁。
- ⑦ 奥野修司『魂でもいいから、そばにいて 三・一一後の霊体験を聞く』三三頁。
- ⑧ 柳田国男『遠野物語』七頁。
- ⑨ 遠野三山は『遠野物語』にも記され、大昔女神が三人の娘を連れ遠野を通りかかったとき「もっともよい夢を見たものに最もよい山を聚ける」と言い一晩過ごし、結果三女が最高峰の早池峰山で姉たちがそれぞれ六

角牛山・石神山をもらうこととなり今もその山をおさめているという。

⑩『遠野市史』と『東北霊山と修験道』からまとめると、早池峰信仰は大同元年に獵師である藤蔵が山頂で権現を見たというところから修験の山として始まる。国の中心では日本古来の神の信仰に仏教が伝来しその中の呪術が組み込まれ現世的で呪術的な修験道思想が登場していて、貧困や病に求められるものが大きく、そのなかで国家統一の際に東北に修験が入り込んできたのだと言われた。御神体は山頂の池の水である開慶水でこの水は猿ヶ石川、北上川の源流であり農業にとって欠かせず信仰されてきた。遠野ではこの藤蔵の権現を見た三月八日は山の神が田の神になる日、宮地を選んだ五月五日は田の神をまつる日、神を祭った六月十八日は水の神をまつる月、九月の早池峰山閉帳は田の神が山の神となる月だと信じられる。修験としてはこの藤蔵が故郷伊豆から伊豆権現を奉持したことからはじまり、この長男の長円坊の時に靈威を聞きつけた慈覚大師（第三代天台座主）に荒々しい神を抑えてもらうため祭祀を譲り別当寺の妙泉寺（天台宗）を立てられる。のちに真言宗となるが天台・真言のどちらかの際にこの早池峰の権現名が与えられていると考えられている。ここから明治の神仏分離まで一山寺院となる。つまり、獵師の山の生活から生まれた修験が、天台の寺門派と結合した熊野系の修験者らに従うようになったとされている。

⑪ここも『遠野市史』と『東北霊山と修験道』から、残った始闢家は庶民からの崇拜・信仰のもと成立している。平地へ行った妙泉寺は阿曾沼氏・南部氏の支配者からの保護を受け変質していく。妙泉寺は山岳宗教の寺から阿曾沼氏・南部氏の保護により地頭の祈禱寺へと移り変わっていった。後の明治維新の際、妙泉寺が

廃寺となるのと残った藤蔵系の始閣家の新三宮が現存しているのは庶民に信仰されていたかそうでないかの差であると指摘されている。早池峰の修験というのは組織化されることはなく、山伏の血や宗教体験から個人で山に登ることとなったと考えられている。

⑫ 柳田氏は『遠野物語』を書いた際は、物語はすべて事実であると述べられていたが、この『山の人生』は五年の時を経て、日本に語られる山人やその信仰心について現実的に迫っていったものであった。ここから読み取ると柳田氏の考える山人とは、日本の原住民が追いやられたものということである。信仰については、本の中では様々な山人伝説に触れ、その出来事の正体とは何であったのかを山に住んでいた原住民や修験山伏にあてはめながらその山人たちの苦悩と共に見ていき、これまでみてきたような山の信仰が徐々に平地から途絶えていったことが述べられていた。

⑬ 柳田国男『山の人生』一七四頁。

⑭ 『遠野物語』の一〇八話には、

山の神が乗り移ったなどといって、占いをする人はよくあり、附馬牛村にもいます。が本業は木挽です。土洩村柏崎の孫太郎も、そんな占いをする一人ですが、以前は発狂して本心を失くしていました。ところがある日、山に入って山の神からその術を教わり、自分のものにしてからというもの、不思議に人の心中を読むようになり、みんなをびっくりさせました。その占いの方法は、世間の占い師とはまったく違います。書物などは見ずに、ただ、頼みに来た人と世間話をするだけです。そのうちに、急に立ち上がると、

部屋の中をぶらぶら歩きはじめます。まもなく、頼みに来た人の顔は少しも見ないで、自分の心に浮かんだことを、ずばりと言います。が、まず、当たらないということはありません。たとえば、「お前の家の常居の板敷を取り外して土を掘ってみる。古い鏡が、刀の折れたのがあるはずだ。それを取り出さねば、近いうちに死人が出るか、家が焼けるぞ」というぐあいには言うのです。占いを頼んだ人が、家へ帰って掘ってみますと、それは必ずあります。このような例は、指で数えては足りないほどあります。（柳田国男『口語訳 遠野物語』一九七―一九九頁）

⑮ 病で生死をさまよっていた菊池松之丞が夢の中で、菩提寺の喜清院へ行きその門の向こうで死んだ父と男の子がいてこっちへ来てはだめだというので引き返したところ目が覚め生き返ったという話である。

⑯ 柳田国男『雪国の春 柳田国男が歩いた東北』一三九頁。

⑰ 柳田国男『山の人生』一九五頁。

⑱ 東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清（ゼミナール）『呼び覚まされる霊性の震災学三・一一生と死のはざままで』四五頁。

⑲ 柳田国男『山の人生』一九五頁。

⑳ 樫尾直樹氏は『シリーズ思想の身体 霊の巻』において、鈴木大拙氏の『日本的霊性』から「霊性」を他者と超越性に着目し、自己を超えた何ものかとながり、それが自分の中や自分と他者との間で働いている



感覚と述べられ、またそれに伴い「スピリチュアリティ」については、超越的な存在者が、自ら働きかけ、影響を与えていることと言われた。

⑳ 鍋島直樹「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム」六四頁。

㉑ 鍋島直樹「臨床宗教師研修」の目的と意義―東北大学大学院との連携協力による大学院教育プログラム」六四頁。